

実施の効果

1. 子どもの変化

1) 松原第七中校区

効果検証の方法

私たちが人間関係学科の実施において大切にしてきたことは、子どもたちの「気づき」と「ふりかえり」であり、その「わかちあい」である。毎回の人間関係学科の授業後に子どもたちが書いた「ふりかえりシート」から、子どもたちの「気づき」をひろいあげ、「わかちあい」として子どもたちの中に共有化してきた。また、授業そのものに対しての子どもたちの評価をデータ集積し、授業の内容づくりや子どもたちの状況分析に活用している。

また、各学期末には学校生活調査・学校生活アンケートを実施し、子どもたちの状況や学校生活にどのような変化があらわれているかを確認している。

昨年度、各校の効果検証の取組は基礎データづくりに重点を置いてきた。蓄積している基礎データは、[1]「あてはまる」「あてはまらない」の率の推移、[2]得点推移の2種類である。この2種類のグラフをベースにしながら、統計ソフトなどを活用し、子どもたちの変化を追っていった。

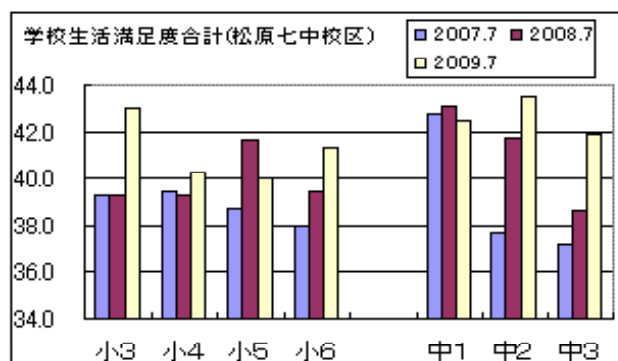
今回の効果の検証においては、学校生活調査・学校生活アンケート、学校教育自己診断などの調査結果をもとに、子どもたちの変化から効果を検証するとともに、子どもたちの集団という意味でのそれぞれの学年という観点で見た効果を検証していきたい。

小学校～中学校の得点推移

2007年度一学期より、松原七中校区として学校生活調査・学校生活アンケートのデータを集積し、校区としての効果測定に取り組んでいる。アンケートの項目内容や項目数には小学校と中学校の内容には発達段階に応じた若干のちがいはあるが、校区として同じ目的で同じ時期にアンケート調査に取り組んでいることに意味がある。小学校・中学校のちがいは何なのか。感覚的には、述べることはできても、本当のところどうなのか、ということに関しては、自信をもって語るができなかったのが現実である。今回の研究開発学校の指定を松原七中校区で受けたことにより、共通の尺度の基礎データの作成が可能になり、比較はもとより、効果測定の結果も共有が可能となった。小学校・中学校の比較データの蓄積が浅いた

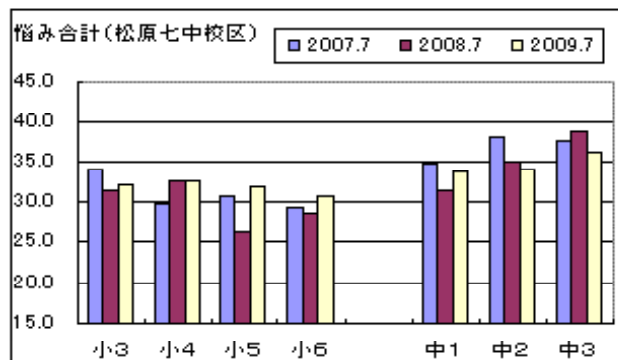
め、本質的な部分が見えるまでには時間がかかるのであろうが、そこから見えてくることからの課題提起は小学校・中学校の相互理解と壁をとりはらっていく上で、極めて重要なものであると思われる。今回は、主な項目に絞ったデータ比較から見えてくることを検証していきたい。

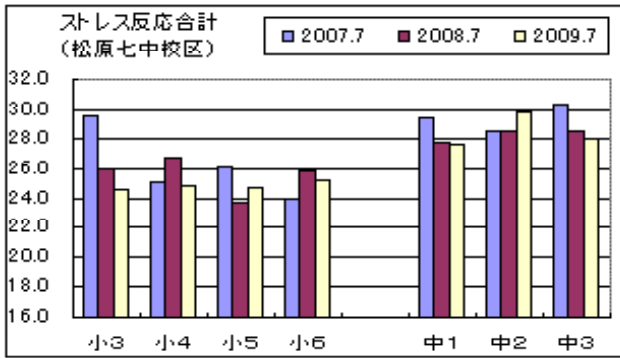
比較にあたっては、同時期の調査ということで、2007年度7月調査と2008年度7月調査2009年度7月調査の3回の調査結果を抽出した。



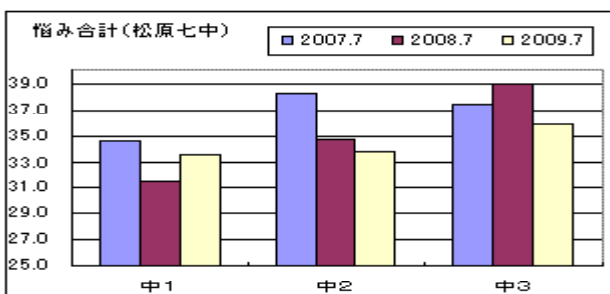
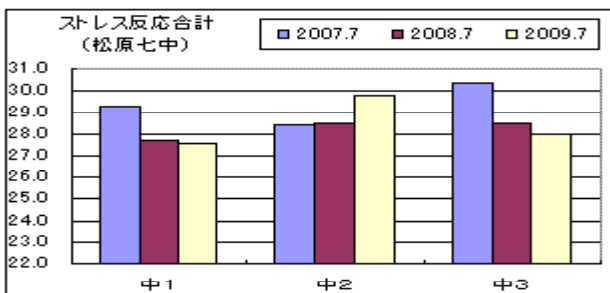
まず、調査方法についてであるが、小学校は4件法、中学校は5件法でおこなっている。この比較に際しては4件法から5件法への換算を行い、5件法の数値に合わせていることをお断りしておきたい。

学校生活満足度の合計得点についてである。「あてはまる・あてはまらない」の率の推移を見たとき、「あてはまる」は小学校では80%超、中学校では70%前半(5件法には「どちらともいえない」という項目がある)というのが現在のスタンダードな割合である。2009年度においては小学校、中学校ともに高い数値になっていることに注目できる。教員と子ども、子どもと子どもの関係性が人間関係学科の成果として高まっているのであろう。2007年度、2008年度のデータからは、小6と中1の間に、学校生活満足度における明らかな段差があったのであるが、小中コラボ授業などの段差をなくす取組の成果として、2009年度の数値においては段差はうまってきたと言える。



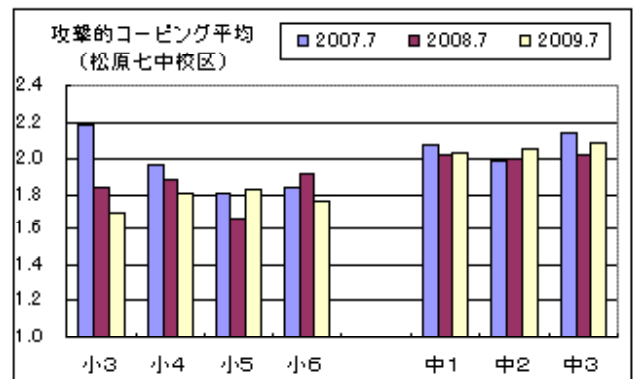
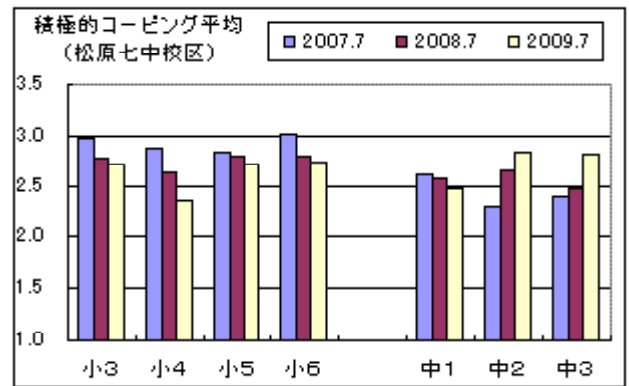


ストレス反応と悩み合計についてであるが、(ストレス反応とは「c1 とても疲れている」「c13 イライラする」などの身体や心にあられる反応を得点化したものである。) 一目見て、小学校では学年が上がるにつれて、ストレス反応と悩みが減少し、中学校では学年が上がるにつれて増加しているということである。小学校においては人間関係的なものが影響し、中学校では進路選択などの個人的なものがあるのかもしれない。悩みの増減とストレス反応の増減には相関があることは、これまでの調査からも明らかになっているところである。つまり、悩みが多ければ、ストレス反応も多くなる。これは、小学校・中学校ともに言えることなのであるが、このように、小・中とデータを並べてみるとあることに気づく。それは、小学校と中学校における悩みとストレス反応との増加の割合である。小学校においては、2007年度の小3の部分を除いて、大きな特徴は見られないのであるが、中学校においては、明らかに違った部分が見られる。中学校のデータを拡大したものが下のグラフである。



悩みは段階的に上がっているのに対して、ストレス反応はそうとも言えないということがわかる。生理学的な成長過程における要素があるのか

もしれないが、悩みと比較して見るならば、小学校では、ストレス反応と悩み合計がほぼ同じ変化を見せているのに対し、中学校では学年が上がるごとの悩みの増加に対し、ストレス反応は上昇していない。おそらく、この点が人間関係学科の積み重ねの成果ではないかと思われる。すなわち、長年の人間関係学科の取組により、松原七中の子どもたちは、しっかりとコーピングしていることを表しているであろう。

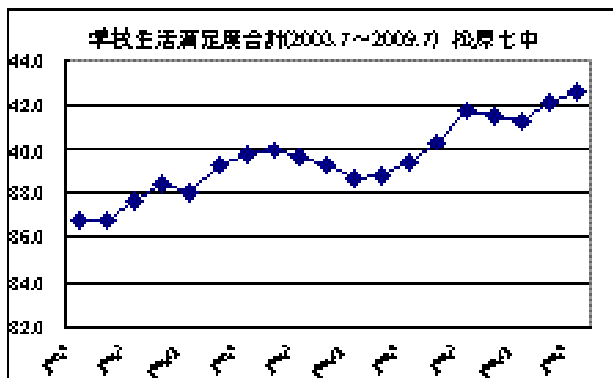


コーピングとはストレス対処のことである。積極的コーピング、攻撃的コーピングの双方において、小学校と中学校の間にちがいがあることがわかる。積極的コーピングは小学校が高い。積極的コーピングの質問は(「d1 スポーツをする」「d2 友だちと話す」「d3 家族に話す」「d4 先生に話す」- 小学校バージョンの質問)の4項目である。そのうち、家族・先生という大人と相談するという項目が4項目中2項目ある。結果から見れば、小学校では「大人に依存している」子どもたちの姿がうかがえる。中学校では「大人離れ - 自立」していく姿が見えてくる。次に、攻撃的コーピング(「d5 物にあたる」「d6 人のいやがることを言う」「d7 人をたたく」- 小学校バージョンの質問)であるが、明らかに中学校が高いことがわかる。中学校は小学校よりも、子どもの表現のしかたが「厳しい状況」になってしまう傾向にある(つまり、「荒れ」たりする)ことが、この数値から読み取れるのではないだろうか。

2) 松原第七中学校

学校生活調査より

a) いじめに関連する項目から見えること



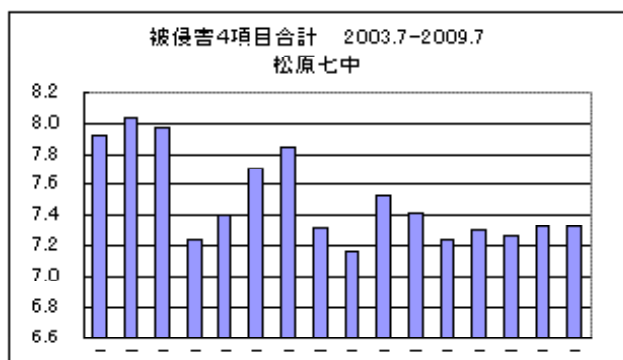
2003年度から2008年度まで、2006年度の若干の落ち込みはあったものの、学校生活満足度合計(合計50点)は年々増え続け、調査開始から本年3月までの間、およそ7ポイント以上の上昇を見せている。本年7月調査がこれまでの最高値となっており、上昇傾向にあると言える。

その上昇理由の原因は、いくつか考えられる。その中でも、「まわりからの行為」ということでピア・プレッシャーの観点から考えていくことにする。

そこで、学校生活調査の中の、

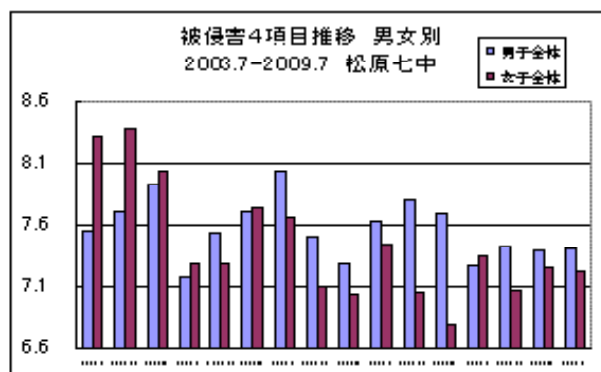
- b4 無視される
- b5 いやなことを言われる(される)
- b6 仲間はずれにされる
- e17 人からの陰口、うわさ話をされること

という4つの項目を拾い出し、合計点(合計21点)を被侵害得点として、2003年度からの経緯を見ると、本年度まで徐々に減少していることがわかった。生徒指導部会や学年会議の中での事例検討を通じて、近年では、子どもたちの中で突発的・単発的な事例は発生しているが、継続的・深刻的な事例には至らずにすんでいる。学校生活調査やふりかえりシートなどのアンケートによ

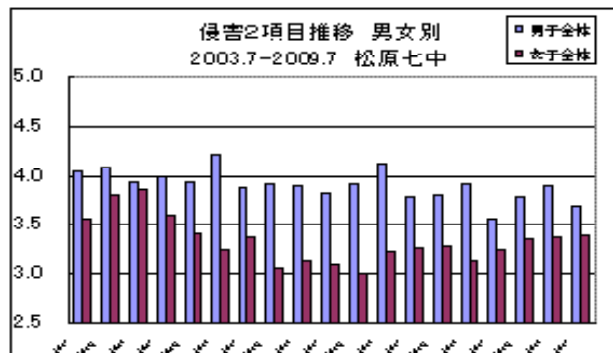


り、子どもの変化をいち早くキャッチし、それを教員間の共通認識にまで高め、いじめをする側・される側の双方に、複数の支援を様々な角度から迅速に行ってきた。その結果が、現在の松原七中の現状をつくり出していると言える。また、いじめに関わらず、子どもたちのトラブルや悩みに常にアンテナを張り、必要に応じて適切な支援を供給し、子どもたちとの相談活動を展開している。それに加え、それぞれのアンケート調査によって、子どもたちと教職員とがつながり、様々な問題の抑止力となっているとも言える。そんな人間関係学科を真ん中に据えた学校づくりの成果として、これら4項目における変化があるのではないだろうか。

これを男女別のデータに分けてみると、男子の



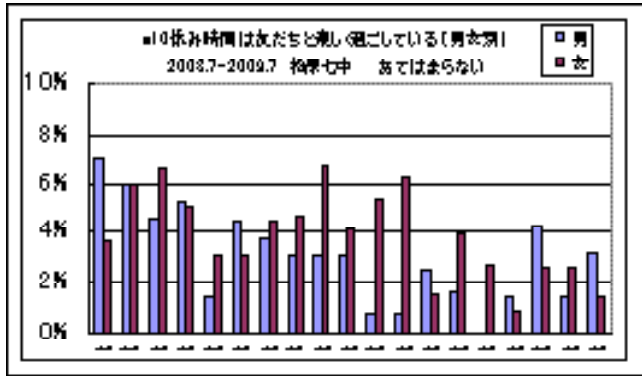
変化の割合に対して女子の変化の割合が大きいことに気づく。女子の数値は2006年度まで減り続け、一時は男子に比べてかなり低い時期もあったが、直近2回の調査においては、ほぼ同じ得点にまで落ち着いてきた。この女子の変化の割合が大きいことについては、特に女子の小グループ化という特徴に対して、自己開示を中心にした人間関係学科の成果であると言える。



さらに、「侵害する」という観点で推移を調べていくと、学校生活調査のストレス対処の項目の中にある

- d6 人が嫌がることを言う
- d7 人をたたく

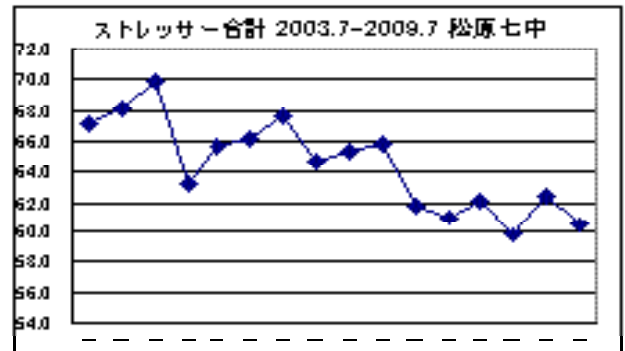
という項目を合計（合計10点）して、侵害得点と位置づけてみた。するとこれも、女子の変化の割合に対する男子の変化の割合の低さに気づく。「d6 人が嫌がることを言う」「d7 人をたたく」という行為は、「関係性の行為」である。これらの行為は、試し行為などとしても望ましい表現を取ることができない中に根強く存在しているのかもしれない。



そこで、子どもたちの関係性の積極面を見られるかもしれないということで、「a10 休み時間は友だちと楽しく過ごしている」の項目を調べてみた。その中の「あてはまらない」の回答を見ると、男子においては順調に減少し、2008年度3月調査では0%という驚くべき数値が出ている。遊びや会話を通じた良好な関係性の構築に、いじめに対する有効性を見いだすことができるのかもしれない。一方女子における課題は、女子が作りがちな閉鎖的な小グループに対してどれだけ風穴を開け、風通しのよい集団にしていくか、ということがあげられる。松原七中の人間関係学科の主要なターゲットスキルは「自己信頼」「共感性」「コミュニケーション力」「対人関係」である。年度や学期の節々には、「わたしのじゃがいも」「さいころトーク」「コロコロトーク」「ルーレットトーク」「すごろくトーク」などの自己開示のプログラムを実施している。その積み重ねが女子の小グループ集団どうしに風穴を開けているのであろう。

いじめの未然防止に関わる有効なスキルは、自己認識を広げ共感性を高めることであると言われている。いじめ問題の解決にあたって常に課題となることが「人の気持ちがわかる」ということである。共感性〔＝人の気持ちを想像できる（WHO ライフスキルの解説より）〕をさらに育てていくことが、いじめ未然防止の鍵になるのであろう。

b) ストレス反応とコーピング（対処）



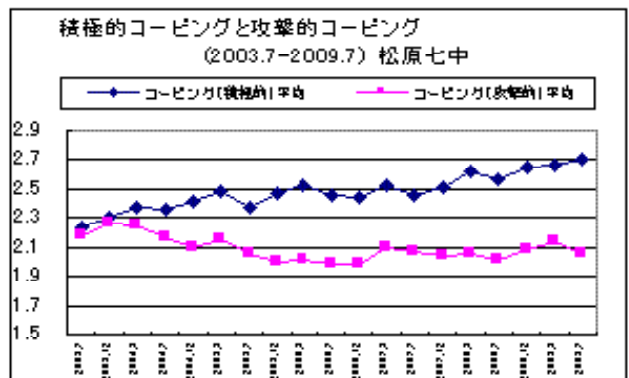
このグラフは、学校生活調査の e の項目であるストレスの原因となるストレスを測定（24項目合計144点）したものである。（質問：悩んだりイライラしたことがこの一ヶ月間にあったかどうか答えて下さい。例「e1 自分や家族の将来のこと」）学校楽しさ度が増してくると、ストレスの原因となるストレスが減少してくることは容易に理解できる。そして、その最大値から最小値までの差はおよそ10ポイントとなっている。ストレスそのものが減少しているのであるから、そこから派生する子どもたちの攻撃的なストレス対処が減少していくことも当然のことである。人間関係学科等の成果により、子どもどうし、あるいは子どもと教員の関係性が深まり、相談活動が活発化してくる。学校生活調査の中では、このコーピングを「積極的」「攻撃的」「抱え込み」「本能的」の4つの観点で調査をしているが、ここでは「積極的」「攻撃的」の2点に絞って見てみる。項目数が異なるため平均値を算出してグラフに表してみた。（最低値1点、最大値5点）

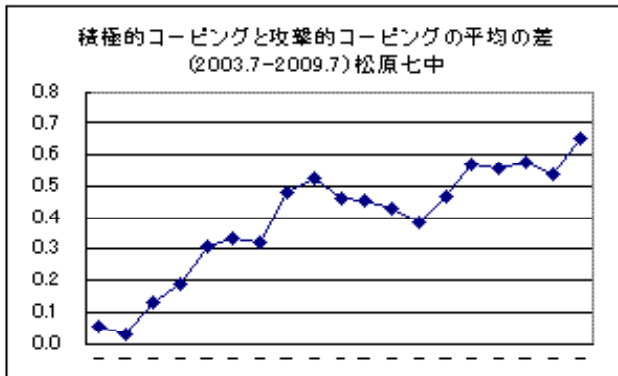
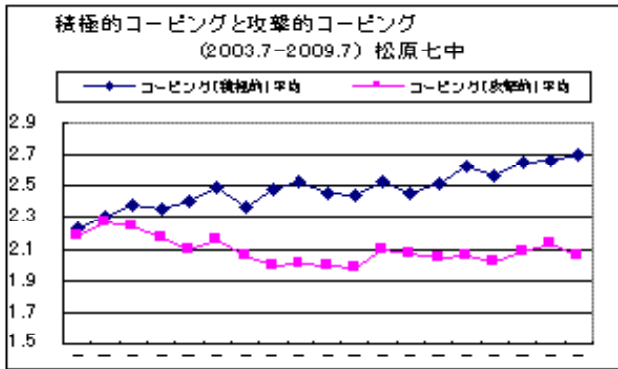
積極的コーピング

- d1 スポーツで発散する
- d2 友だちに相談する
- d3 家族に相談する
- d4 先生に相談する

攻撃的コーピング

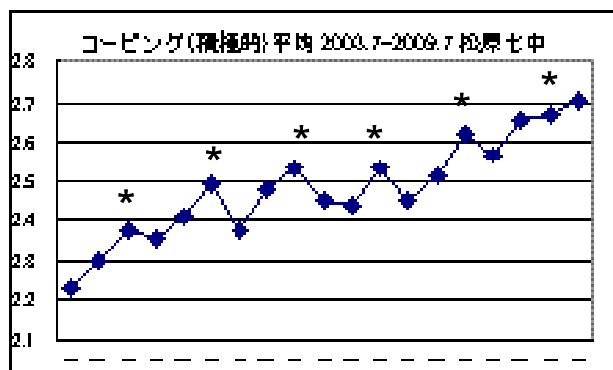
- d5 モノにあたる
- d6 人が嫌がることを言う
- d7 人をたたく





積極的コーピングと攻撃的コーピングの差 (= 積極的 - 攻撃的) としての推移を表したものが前の表である。ほぼ差のない状態からのスタートであったが、現在では、ほぼ 0.6 ポイントの差となっていることがわかる。5 件法 (1 点 ~ 5 点という 4 ポイントの中での変化) での測定であるので、この差は大きいと言える。この差を広げていくことが、いじめ・不登校の未然防止につながっていくことは間違いがない。

さらに、興味深いデータがこの表である。



積極的コーピングの推移だけを取り出したものである。* 印をつけた時点まで上昇し、* の次の時点で下降し、また同じパターンで上昇している。そして、* 印はすべて 3 月調査であるという事実がある。学校生活調査は年 3 回、各学期末に実施をしている。実施月は 7 月・12 月・3 月である。新学年になると 7 月から 3 月まで上昇し、次の新しい学年になった 7 月で下降する。つまり、卒業した 3 年生の代わりに 1 年生が入ってくる、ある

いはクラス替えがあり新しいクラスになると数値が下がるということである。子ども・教員ともども、スキルアップを重ねている状況が、階段状に上昇しているグラフから読み取ることができる。年度毎に上昇しているのは、子どものスキルアップであり、階段状に上昇しているのは教員のスキルアップや校区連携の成果であろう。クラスや学年の子ども集団をベースにして、一年間の人間関係学科等での学びの成果としてあらわれていることを如実に表している。

更に、一番直近の 2009 年 7 月調査の数値に注目していただきたい。これまでの変化であれば、2009 年 3 月調査 (* 印) からは下がるのであるが、今回、上昇している。松原七中の 7 年間に渡る効果測定において、初めてのことである。いくつかの要因が考えられるが、松原七中における教員の子どもとの相談活動が充実してきた結果であると言える。

c) 「d10 学校を休む」子と教員の相談活動

「研究開発の内容」の項目を書いていた時に、イライラしたときに「d10 学校を休む」子とはどういう子どもなのか、ということが疑問になり、登校回避感情という位置づけで「d10 学校を休む」という項目と全ての領域、質問との相関を調べた。統計ソフトの計算結果に * (相関があるという印) がついた項目を見ていると、「d4 先生に相談する」という項目に * がついているのを発見した。少々、驚きと感動を覚えながら「そうか、登校回避感情をもつ子は、先生に相談するのか。」と。でもこれは研究開発の成果かも知れないと直感して、2003 年 7 月からの相関を全て調べてみた。それが、下の表である。参考までに、この質問に対して、「3. どちらとも言えない」「4. あてはまる」「5. かなりあてはまる」と答えた子どもの全体に占める割合をつけ加えている。

実施	Pearson の相関係数	3 4 5 の割合
2003. 7	0.026	16.7 %
2003.12	0.240 * *	8.1 %
2004. 3	0.118	10.8 %
2004. 7	0.103	10.7 %
2004.12	0.119	8.5 %
2005. 3	0.114	15.0 %
2005. 7	0.189 * *	12.7 %
2005.12	0.087	8.8 %
2006. 3	0.227 * *	10.9 %
2006. 7	0.143 *	8.4 %

2006.12	0.106	11.0 %
2007. 3	0.025	13.3 %
2007. 7	0.096	9.2 %
2007.12	0.245 * *	11.0 %
2008. 3	0.096	13.3 %
2008. 7	0.182 * *	10.2 %
2008.12	0.338 * *	12.7 %
2009. 3	0.181 * *	11.2 %
2009. 7	0.247 * *	7.7 %

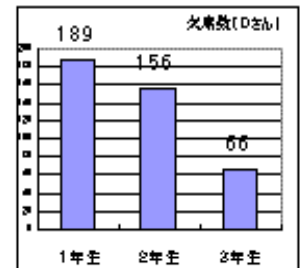
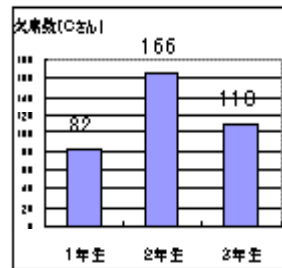
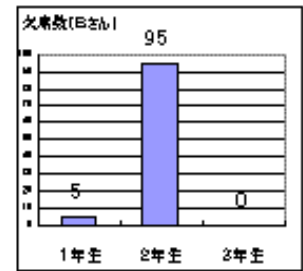
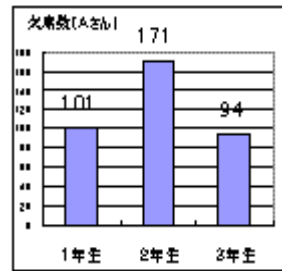
* 相関係数は 5 %水準で有意(両側)です。

* * 相関係数は 1 %水準で有意(両側)です。

この表からわかることは、登校回避感情を持つ子が、「先生に相談する」という感じ方をいかにもっているかということである。2003年から2005年にかけての研究開発の時期は、9回の調査の中で、3回の相関がまばらに見られる。2008年3月の調査までは同じような相関の出現割合であるが、2008年7月調査より、4回連続して相関が見られる。教員の側からすると、登校回避感情をもつ子に課題意識をもち、相談活動を意識的に取り組んできているということである。結果として、登校回避感情をもつ子は、教員に相談しているという感覚をもって来た、ということが実際のことであろう。「ほっとアンケート」を材料にして取り組んでいる教育相談をベースにして、学校生活調査の結果からの速報をもとに、子どもたちの微妙な変化を感じ取れる力を教員がつけているということのあらわれである。

不登校等の学校復帰と未然防止

「研究開発の内容」においてあらわしたように、松原七中の不登校生の率は、2001年度には6%を越えていたものが、2003年度からの研究開発の取組で、減少をし続けている。2009年度は暫定的ではあるが(1学期で10日以上欠席)2%を切る割合になっている。これは、人間関係学科や教育相談の充実の結果により、不登校生等の未然防止が進んできていることであらわれである。2008年度の卒業生の不登校生等への支援結果より、1・2年生において、いったん不登校の状態に突入しても、3年生においては一定の学校復帰を実現してきた。不登校生等支援会議を中心にした継続した複数の支援のもと、もっとも効果のあるチーム支援を追求してきた結果であると言える。校内でのアセスメントと支援策の情報共有はもちろんのこと、関係諸機関との連携もイニシアティブをもって進めてきた結果である。



上のグラフは、卒業生の欠席数であるが、4人ともに1年及び2年の欠席数を3年時においては下回る欠席数になっている。現3年生にも、4人のチーム支援が必要な子どもが在籍しているが、学校復帰だけではなく、卒業後の進路選択に対しても適切なアセスメントを行い、将来社会で自立し、社会へ貢献できる人間へと育てていって欲しいという思いをもとに、毎日の支援に取り組んでいる。

26期生(現1年生)について

毎年、入学前の3月に学校生活アンケートを実施しているが、その中のそれぞれの項目(学校生活満足度・悩み・ストレス反応・自己肯定感)の相関関係を分析した。それが、次の表である。

Pearsonの相関係数

	学校生活満足度	悩み	ストレス反応	自己肯定感
学校生活満足度	-	-0.481(**)	-0.265(**)	0.286(**)
悩み		-	0.691(**)	-0.598(**)
ストレス反応			-	-0.473(**)
自己肯定感				-

** 相関係数は 1%水準で有意(両側)です。

どの関係も強い相関関係にあり、子どもたちにとって「学校生活満足度」が大きな影響を持つことが読み取れる。また、「悩み」の内容を調べると、「b1.勉強が分からない」と「b3.友だちとトラブルがある(多い)」が特に多い項目となっている。そこで、今年度の1学期のHRSは、特にグループワークを重点的に行い、友だちとコミュニケーションをとったり、協力したりする機会を多く取ることにした。

a) ふりかえりシートより

・「わたしのジャガイモ」をして、伝えるってす

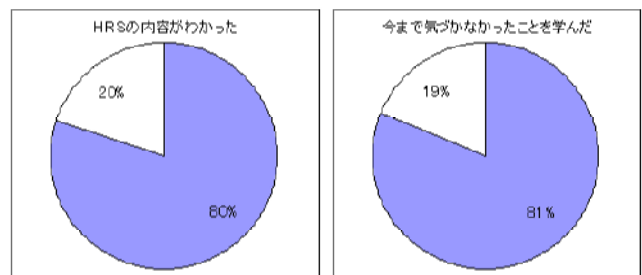
ごく大切やなぁと思った。友だちとの関係もこうやって深めたいと思った。

- ・「さいころトーキング」をして、班の人の夢などが聞けた。班の人のことが少し分かって嬉しい。



- ・「何でもキャッチ」をして、優しく投げることがいいと思った。投げる相手が自分のことを考えてくれたと思う。言葉も一緒だと思う。
- ・「流れ星」をして、同じ情報を聞いていても、全然受け止め方が違うんだなぁと改めて感じた。ふだん、一人一人意見が違った中で、ともに過ごすって良いなぁと思った。
- ・「アニメの村」では、みんなで意見を出し合って考えて分かった。たぶん、1人ではよく分からなかったと思うけど、みんなで考えたから分かったと思う
- ・「サバイバルゲーム」をして、自分だけがいい思いをしようとするんじゃなく、他人のことも気づかわないといけないと思った。
- ・「スパイダーリフト」をして、何かみんなで1つのことをするには、みんなが相手のことを考えなければいけないということを学んだ。
- ・「スーパー新聞ジグソー」は、小学校の時の「新聞ジグソー」より難しかった！でも、みんなで協力できて楽しかった！完成して嬉しかった。

b) HRS 自己評価 (1学期末) より

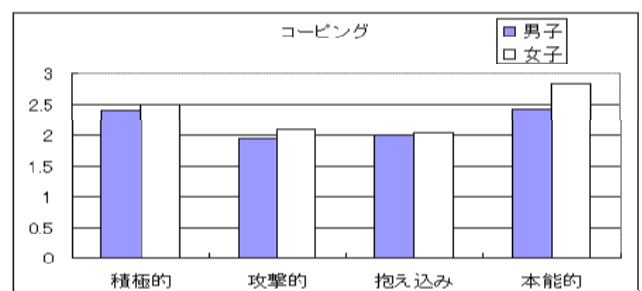
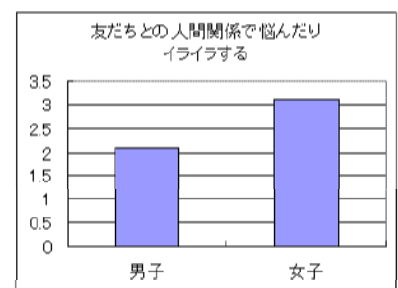


校区の恵我小学校・恵我南小学校に加え、他の校区からの転校生3名を迎えての1学期。人によって感じ方や考え方、得意・不得意などがちがうということが分かった1学期。HRSでは、コミュニケーションの取り方や協力するためのスキルを学ぶワークを行った。上のグラフは、1学期末に子どもたちにとってのHRS自己評価のアンケートである。多くの子どもたちがHRSの学習の中で、HRSの内容について理解し、今まで気づかなかったことを学んだと答えている。

また、この評価では、役に立ったワークとして、「スーパー新聞ジグソー」や「何でもキャッチ」などのグループワークをあげる生徒が多かった。（「スーパー新聞ジグソー」は85.7%、「何でもキャッチ」は75.5%の生徒が「自分に役に立った」と答えている）

c) 現状とこれからの課題

グループワークを重視した1学期。1学期を終わった段階で、出身小学校に関係なく話したり遊んでいる姿を見ることができた。男子はトラブルが多かったが、それも徐々に収まりつつある。一方で、女子はあまり表だっでのトラブルは少なかった。しかし、右のグラフ（7月の学校生活調査、5点満点）を見ると、友だちとの関係で悩んだりイライラしている女子は多い。



上のグラフは、男女別のコーピングの方法を比

べたものである。

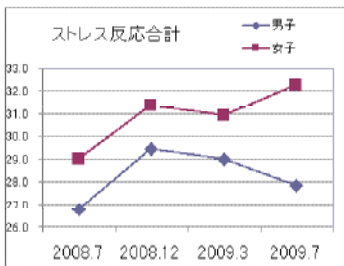
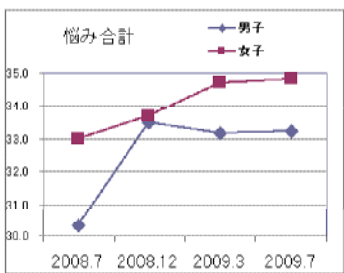
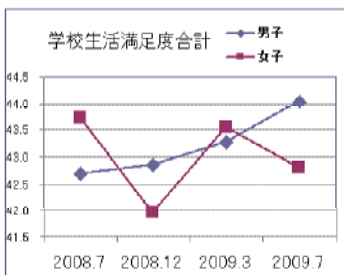
2学期のHRSは、ストレスマネジメントを行い、こうした悩みやイライラに対するコーピングを学習する。「モノにあたる」「人が嫌がることを言う」という攻撃的なコーピングをしている生徒が、「人に相談する」などの積極的なコーピングを身につけていってほしい。

今後も子どもたちの現状に合わせて、HRSなどの取組を進めていきたい。

25期生（現2年生）について

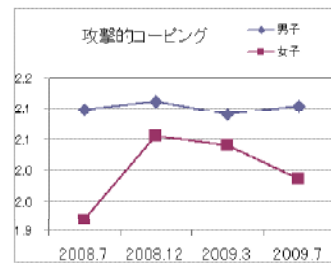
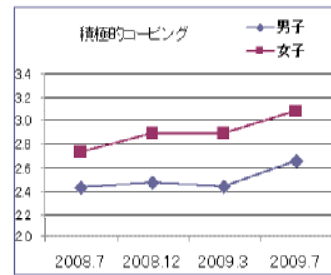
25期生は、小学校から「人間関係学科（あいあいタイム）」に取り組んできた初めての学年である。中学校のワークは、HRSが“楽しい時間”になることを心がけて実施してきた。その結果、1年2学期末のアンケートでは、「HRSを楽しんだ」と「HRSの内容が分かった」がともに91%、「気づかなかったことを学んだ」が81%に達した。中学校でのHRSの取組みが、小学校の『あいあいタイム』で培ったきた“学び”を深め、さらに自分の考えを広げる機会となっていることがうかがえる。

a) 学校生活調査から

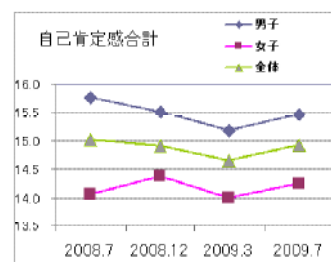
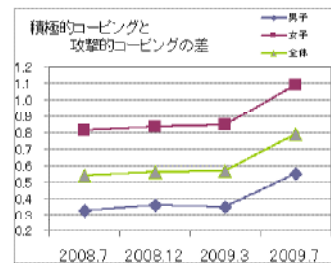


1年2学期での悩みの増加は、「b1 勉強が分からない」と「b2 がんばっても成績があがらない」で70%を占めている。このときの女子の「学校楽しさ合計」はすべての項目で低下しており、『授業』（「a2 楽しみな授業がある」「a3

よく分かる授業がある」と『先生』（「a8 楽しくておもしろい先生がいる」「a9 悩みを聞いてくれる先生がいる」）で低下理由の51%、『友達』（「a4 楽しく話せる友達がいる」「a5 悩みを相談できる友達がいる」「a6 困ったとき、助けてくれる仲間がいる」）が28%を占めている。一方男子は、『授業』では低下しているが、『先生』も『友達』も上昇しており、これが男女の差となって表れている。



女子が、積極的コーピングで対処できており、攻撃的コーピングが減っているのは、明らかにHRSの成果である。



ストレスに対するコーピングをみると、積極的コーピングは女子の方が高く、男女とも上昇している。攻撃的コーピングは男子が高く横ばいであるのに対して、女子は1年の2学期で上昇したが、3学期以降は減少している。「悩み」と「ストレス反応」が増加している

積極的コーピングと攻撃的コーピングの差の推移をみると、男女とも同じ推移をしており、特に、2年生での上昇が大きい。また、自己肯定感も2年になって上昇に転じている。

これらは2年1学期の取組みを反映したものと評価できる。

b) 2年1学期の「ふりかえりシート」より

～アイウエオ自己アピール～

・みんなの話を聞いて、そうなんやなあと思ったことがたくさんあった。

・自分のことをめっちゃほめるって難しいなあって思った。

～ソーシャルスキルアンケート～

・気づかない自分が見えて自分を変えていこうと思った。



・今までの自分の行いを改めて振り返ることができた。

・自分の足りない優しさを知ることができた。

～スーパーすごろくトークン～

・話してみないとわからないことっていっぱいあるねんなあって思った。

・言うのになんかちょっと勇気があるけどみんながそれに反応してくれたからうれしい。

～ On The desk ～

・何事も集中してやらないと成功しないと言うことがわかった。

・覚えたつもりじゃなくて、ちゃんと覚える事が大事やなあって思った。

～伝達ゲーム～

・一方的だと、伝えたいことも伝えられないということがわかった。

・難しくなるほど聞く側も伝える側も気持ちが変わっていくけど、分かったときはすごく気持ち良かった。

～『あいうえお』ロールプレー～

・同じ「あいうえお」でも、表情や態度がちがうだけで、とても違うように感じた。

・言葉で優しく言っても、表情とかで相手が勘がいしたりしてしまうから、どっちも大切だと思った。

～スパイダーフライヤー～

・気持ちを1つにしやなでけへんなぁ～って思った

・むっちゃ難しかったけど、出来たらむ～ちゃ達成感があってよかった。

～どう答えたらええんやろ～

・どんな言い方されたらうれしいかなって考えた。

・キツイ言い方って意外とスグ考えられたけど、やさしい言い方って意外と思いつかへん。

・相手にイヤな想いをさせないでちゃんと言いたいことは言えるように考えた。

～もめごと解決～

・もめごと、みんなで知恵を出し合って何とかすれば解決できるんだなあと思いました。

・こんな言い方もあるんやなあ。言い方とかを考えるだけで全然違うなあと思った。

・どうやったら解決できるセリフになるのかとても悩んだ。ふだんはとくに考えやんと人にもの言ってるときがあるけど考えるとむずかしい。

c) 今後の課題

HRSによって、子どもたちの人間関係がよくなり、ストレス対処にも良好な結果が表れている。ただ、学年が進むにつれ、子どもたちは、HRSが“楽しい時間”だけでなく、もっと考え、新しい気づきをもっと得られる時間になることをのぞむようになってきている。相手の立場に立ってものごとを考えたり、価値観の相違を知ること、また、自分自身への肯定感などを、さらに深めていく取り組みが必要である。

また、HRSによってストレス対処がよくなっている現状に甘んじることなく、悩みの増えた最大の理由が「勉強がわからない・成績が上がらない」ことであることを直視し、すべての教科で、楽しくてわかりやすい授業を創造し、確かな学力をつける努力をしなければならない。

24期生(現3年生)について

a) ふり返りシートより

- クラスびらきのHRS -

～私のCM～

・自分の事を理解してくれる仲間がちゃんといるんだと思った。そんな仲間を大事にしたい!

・今日が初めてのHRSだったけど、みんなの事を知ることができて良かったし、自分のことも分かってもらえてよかった。これからこのクラスで頑張って、良いクラスつくっていきいたいし、もっともっとみんなの事知りたいと思った。

～私のピーナッツ～



・考えるのが大変だった。でも、ピーナッツの声
が聞こえたわっ みんな色々自己紹介を考えて
いておもしろかった。

・めっちゃたのしかつたし、何となく班の距離が
縮まった！

- 修学旅行と連動したHRS -

~ すごろくルーレット・トーキング&ドゥイング ~

・楽しかった！言いにくい事も言えてよかった。
楽しくできたから良かったし、修学旅行楽しみ
になった。

・とにかくおもしろかった。いっぱい笑ってたけ
ど、そのうちにみんなの事を知れてよかった。

~ トラストフォール ~

・倒れる前、こわいな~と思っていたけど、班の
子やたらうちでも受け止めてくれるって思っ
て倒れ込んだら、ちゃんと止めてくれたから嬉
しかった。信頼することってとっても大切な
んだな~と思った。信頼するって気持ち良いこと
なんだと思った。

~ ロールプレイ「こんな時どうする？」 ~

・自分も相手に頭を下げて謝ってもらえたら、頭
を下げて謝ると思うけど、にらまれたら、にら
み返してしまうと思う。謝ると謝らないのと
では全然ちがうな~と思った。

- 境界設定を考えるHRS -

~ 境界を知ろう 「境界」って何？ ~

・クラスの中でもたくさんの意見があったし、人
によって思っていることもたくさんあると思

った。

・「境界」というのがあったことが分かった。

~ 境界を知ろう 「それって侵入」 ~

・今回の授業で色々な子の境界を知った。これか
らはそれを知って関係を作っていきたい

・仲のよい子でも距離が近づきすぎたりすると嫌
だから普段でも気を付けようと思う

~ 境界を知ろう 「境界を知ってアサーション」 ~

・自分の生活にめっちゃ関係あるなって思った。
あんまり頼り過ぎてたら相手が嫌な思いをする
から気をつけようと思った。

・今までイライラをぶつけてたけどそれで辛い気
持ちになる人もあるって知った。

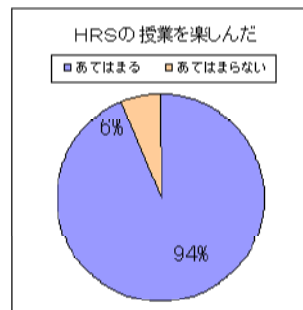
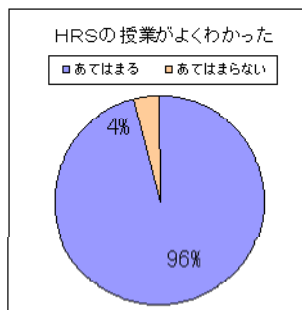
- 職業調査と連動したHRS -

~ アポの取り方 ~

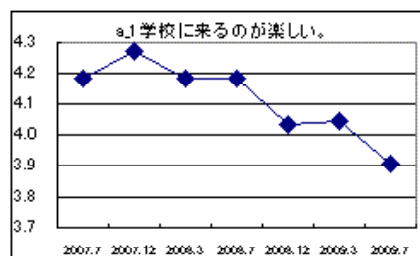
・実際にアポを取る練習をしてみて、まだ先生た
ちが相手やったから気は楽やったけど、それ
でも緊張したから1回やっておいてよかった。

b) HRS 自己評価より

HRS 自己評価からみると、3年生の約90%
の子どもたちが「HRSはよくわかる」「楽しい」
と感じている。これは、3年間通して子どもたち
のHRSに対する評価として共通している。



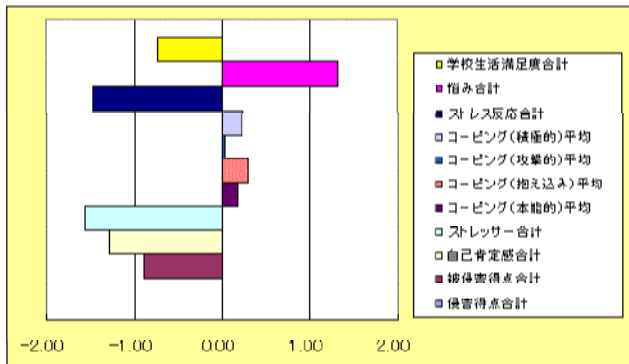
c) 学校生活調査などから見えてくる変化



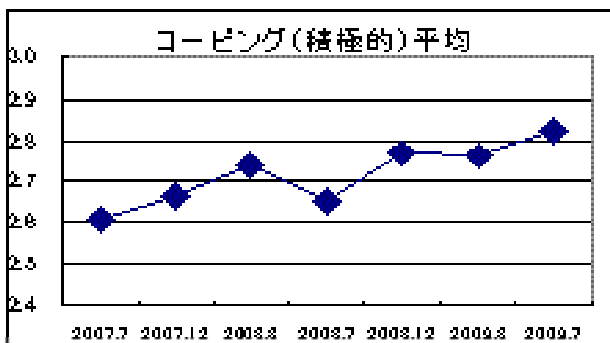
24期生(現
3年生99名)
は、校区とし
ての研究開発
指定を受け、
小学校の頃に
試験的な形で
HRSを体験
してきた学年
である。例年
の3年生と同
様に、入学時
から比較する
と、「学校に



来るのが楽しい」等の学校生活楽しさ度の数値は減少傾向にあり、「悩み」などについても例年と同様増加傾向にある。これらは、進路選択等へのプレッシャーやストレスが関わっている。プラスの変化としては、子どもたちどうしの関係性の深まりがある。1年2年3年と年月を重ねていくため、関わりが深まることは当然だが、現3年生もその深まりが順調であることが分かった。関わり方の深まりは、現3年生が1年生の7月（2007年7月）に取った調査と現在（2009年7月）調査の差からも見えてきた。侵害得点合計の差は3年前と比較して差がゼロとなり、グラフ

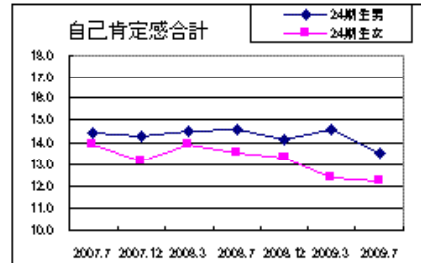


には表せられなかったが、被侵害得点合計はマイナスの数値が出ている。これは、子どもたちの感じ方が変化し、関係性が深まったからではないかと考えられる。また、「悩み合計」は増加してい

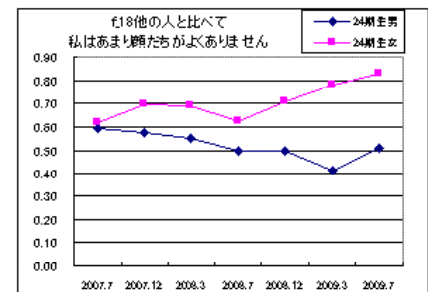


るが、様々な形で現れる「ストレス反応合計」は減少している。「悩み」は増加しているものの、積極的コーピングでそれを解消できる子どもたちが増えてきたのが成果だと考える。

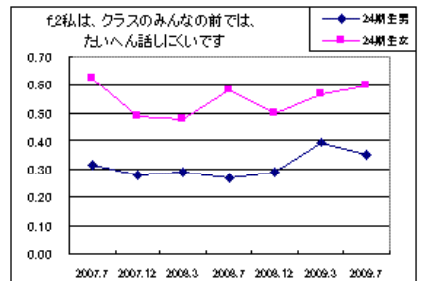
d) 今後の課題



2007年7月調査と2009年7月調査の差からも分かるように、全体として「自己肯定感」の数値が減少している。特に、女子にその傾向が強い。



特に、容姿に関する項目や、人前で話すことなどの項目で男女の差が大きい。この学年は男子が全面的に目立つ場面に出る傾向が強くなり、リーダー層の女子であっても、前に出ることも縁の下



持ち的に活動することが多かった。後期以降、進路選択の時期と重なり、さらに自己肯定感が下がるのではないかと考えられる。卒業への取り組みを中心に子どもたちの自己肯定感を上げていける取り組みを、これまで成果の上ってきている仲間との関わり方の深まりとリンクさせ行っていきたい。また、義務教育最終年度を迎え、社会へ出て行く子どもたちに、この現状の社会をつくっていく、市民性をはぐくむ教育を学年の道徳・総合・特活の活動と共に行っていきたい。